

フットサル大会 サッカーを通じた難民支援



横浜Fマリノスのグラウンドでは、コートを6つに区切り、各コートではそれぞれ白熱した試合が展開された。大会には、選手、観客、ボランティアスタッフを含めて合計約350名が参加した
©M.TONEGAWA



WAVOC・UNHCRチーム
©M.TONEGAWA

2002年のFIFAワールドカップ決勝が行われた横浜日産スタジアムで、難民達が日本の支援者と一緒にサッカーをする。そんな日が実際に来るなんて、あの頃いったい誰が想像しえたのだろうか？

2006年6月25日、夢が現実となった。日産自動車社会貢献チーム及び早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)の主催により、あの横浜Fマリノスのホームグラウンドで「世界難民の日」フットサル大会2006が開催されたのだ。日本在住の難民の方々が出身国や民族別にミャンマー、アフガニスタン、クルド、イラン、インドシナという具合にチームを作り、全体で12のチームが出場した。WAVOC赤松さんのご配慮により、UNHCR駐日事務所も、インターンや職員の家族までかき集めてWAVOCと合同チームを組んで初出場を果たした。試合は15分ハーフ、グラウンドを六分割して予選が行われたが、実際に走ってみるとゴールは遠く、時間も果てしない。難民チームはユニフォームも統一し、明らかに練習を積んでいるとみえてパスワークも軽やかだった。ラフプレイもほとんどない。試合前は、日ごろ大変な思いをしている難民の人たちに勝ったりすると申し訳ないなどと不遜なことを考えていたが、なんのことはない。思いっきり走り負けをし、2敗1分(得点はゼロ)で決勝トーナメントにも進めなかった。

優勝は伏兵のカンボジア難民チーム。でもどのチームが戦っていても皆で観戦し応援し盛り上がっていた。早稲田大学ファルコンズのチアリーディング、ラジオ体操創始者青山敏彦さんと一緒にラジオ体操、お昼休みのよさこい踊りとサイドイベントも楽しかったし、女性や子供たちも参加できるフットサルも企画され、難民チームのメンバーだけでなく来た人みんなが一緒になって楽しめるよう工夫されていた。改めて主催者及びボランティア(審判も頑張っていました)の方々に深く感謝申し上げたい(来年はちゃんと練習してUNHCR駐日事務所としては是非1勝をあげたいですね)。

後日、WAVOC赤松さんの後輩だという早稲田大学宇賀神君がオフィスに訪ねてきて、フットサルを通じた難民支援について「Campus & Scope」という学生新聞(2006秋季号)に記事を書いてくれた。宇



写真提供: 特定非営利活動法人 JEN(ジェン)

賀神君は、「難民支援なんて自分には関係ないと思っているけど、本当は何か人の役に立てたらいいなと思っている学生は沢山いる。フットサルを通じて難民を励ますことができるんだというメッセージを伝えたい」と言ってくれた。

実はサッカーを契機とした難民支援にはもう一つの例がある。JENの戸倉さんの情熱にほだされて、一緒に東京ヴェルディ1969の岸田広報部長(現総務部長)に直談判し、味の素スタジアムと国立競技場のヴェルディのホームゲームで、試合前に難民がサッカーをするビデオを流してもらい、J-FUN(スパイス7を参照)のメンバーで募金をした。実際、娯楽の乏しい難民キャンプではボール1個で遊べるサッカーは人気である。ヴェルディのラモス監督はブラジルから日本に帰化した。先日は偶然ラモス監督の賑やかで暖かいご家族と観戦で一緒したが、日本に馴染むまでは苦労されたのではないかと思う。その孤独や疎外感、日本にいる難民の方々の辛さと似ているのかもしれない。そんなラモス監督をいつか難民キャンプにお連れして、難民と一緒にサッカーすることで彼の情熱を希望に変えて難民に伝えられないかと、岸田部長や後任の勝沢広報部長たちと考え始めている。

難民の方々と一緒にサッカーをしていて改めて強く感じたことがある。ゲームをしているときは、勝ちたいという思いは同じ。仲間にボールをつないでゴールしたいと思う気持ちも一緒。そこには難民だからとか、難民のくせになどという偏見の入り込む余地はない。それがサッカーに限らず、スポーツのよさだと思う。同じルールの下で純粋に技を競い合い、勝負に熱くなる。そんな単純なことから、日本での難民の受け入れを考え始められたらと願っている。

2006世界難民の日フットサル出場 WAVOC・UNHCRチーム主将 岸守一(当時41歳最年長)